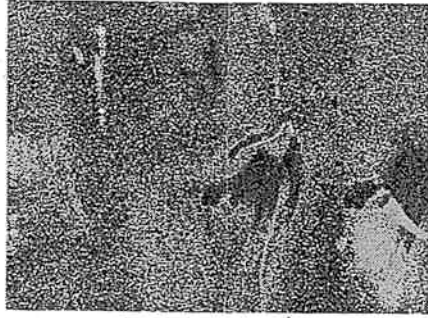


# 詩の旅 絵の旅

小柳 玲子

27

昨年、童話「わし姫物語」が新しい訳で復刊された。私が買った時はすでに四刷、多くの人が読んでくれたらしい。今回の訳は「わし」といたずらキルディーン」というタイトルで、日本で初訳（一九四二年）された大槻憲三氏のお孫さん長井那智子さんが訳されている。私はまさにその初訳を幼い日に読んだわけで、その本を疎開のどきくさで失くしてしまった時は悲しかった。



## わし姫物語

けて美しく、王女キルディーンは抱きしめたいほど可愛かったのである。それがなんとということだろう、肝心のお姫様がなんとなくそこいらにいる普通の女の子なのである。

「この絵、誰かが描き直したのかな」と不満な私に母は笑って言ったものだった。

「それは昔のままですよ。あなたの目が、いろいろな知恵がついて汚れたん

です」

きつとそうなんだ。戦時下の私たちはまず外国のお姫様なんて知らない。西洋の城も天蓋付きのベッドも知らない。毛皮で縁取りされた長いマントはなんてきれいだったろう。もう憧れという憧れが「わし姫物語」に集中しこの本は宝箱だったのである。新訳の後記で初めて知ったのだが、この挿絵はフランスのジョブという有名な画家の手によるもので、特にこの挿絵が傑作なのだそうである。母が言ったとおり、私の目も心もつまらぬおとなの知識や知恵で濁ってしまったのだ。

た。もっとも死ぬか生きるかのやせ細った私を抱えていた母はわし姫ごころではなかったに違いない。私は二十歳の頃、この復刻版を手に入れ、現在でも所蔵している。復刻版を買った日、実をいうとがっかりして母親に嘆いたものである。幼い日あんなに私を夢見心地にさせたお姫様の絵が「こんなチヤチヤなものだった！」と訴えたのである。私の記憶の中では女王様はこうた

「わし姫物語の作者はマリト女王。ヴィクトリア女王の孫にあたる人でルーマニアの王室に嫁いだ。短かったルーマニアの春の時代を生きた人なのである。

（詩人。挿絵は直井和夫さん）